

# [ In MINOKAMO, you are not a foreigner, you are the partner. ]

岐阜県美濃加茂市長 伊藤 誠一

## 外国人市民は 大切なパートナー

「In MINOKAMO, you are not a foreigner, you are the partner.」という講演タイトルには、今日、私がお話したいエッセンスと強い思いが凝縮されています。外国から美濃加茂市に來られて市民となる方は、すべて私たちと一緒に地帯のため、あるいは仕事や家族のために頑張っていたく方ですから、市としてもしっかり応援します。そんな意味を込めて、今回の講演はこのようなタイトルにしました。

美濃加茂市には、多くの外国人が住んでいます。ただし、ややもすると経済手段としての労働者という意味合いが強く、お金を稼ぐために來て、いつかは帰って行く。当初、市としては、そういう感覚でお付き合いをしていました。しかし、時代とともに私たちの考え方が少しずつ変わってきていることを、ぜひ皆さんにお伝えしたいと思います。

市としては、外国人市民に対して、これからともに自治体運営を担う、地帯活動のパートナーとして大切な方々だという思いをもって接していきたいと思っています。

4月1日の入管法（出入国管理及び難民認定法）改正に合わせて、市役所の窓口に市の考え方を張り出しました。「当市にお住まいになる外国人の方

に対して、市は全力で支援し、様々な対応についても努力します」と。ただし、「日本語が得意でない方は、自ら通訳できる人を同伴してください。そうでない場合は対応しかねる場合があります」と述べています。

つまり、市は、一生懸命支援はしますが、それは、ここに住むために努力をしようとする方に対して支援することを明記しました。

また、外国人を受け入れる企業にも、外国人の方が市にお越しいただく際の考え方について協議を行っているところです。人材派遣会社が多いのですが、「自分たちでしっかりやりたい」と、おっしゃる企業が最近増えてきています。これは本当にありがたいことです。

しかし、「それは行政の仕事でしょう」と言われるケースもあるのが現状です。私は市民の税金を預かって、最終的には美濃加茂市民が、「よし、この人たちと一緒に生きていこう」、そう思ってもらうために税金を使わせていただいています。少々極論になりますが、そうした考えに賛同だけない企業とはお付き合いすることは難しいと思っています。

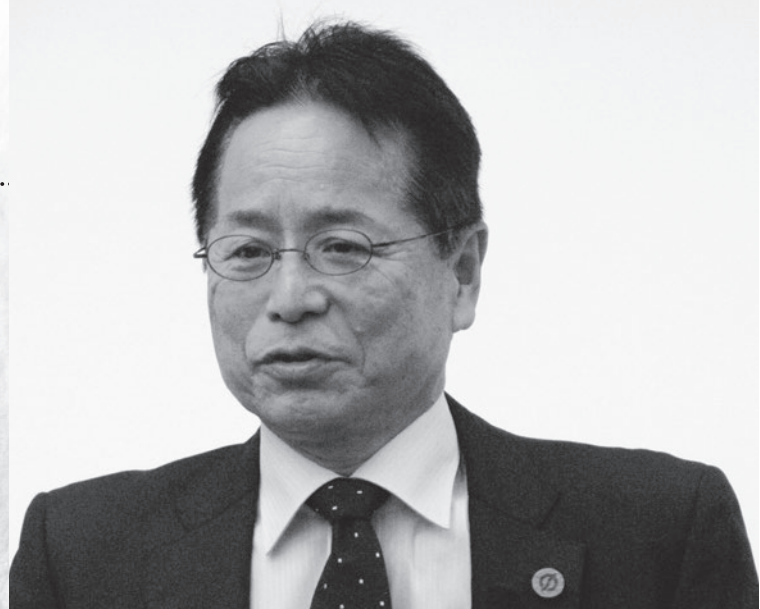
## 企業誘致を積極的に 進めてきた美濃加茂市

それでは、美濃加茂市についてご紹介しましょう。位置は日本列島のほぼ真ん中、岐阜県にあり

## 伊藤 誠一 (いとう せいいち) .....

### 略歴

昭和54年 (1979年) 美濃加茂市入庁  
平成15年 (2003年) 建設部区画整理課長  
平成18年 (2006年) 環境経済部商工観光課長  
平成20年 (2008年) 経営企画部行政経営課長  
平成22年 (2010年) 総務部長  
平成23年 (2011年) 産業建設部長  
平成25年 (2013年) 市民協働部長  
平成26年 (2014年) 総合戦略室長  
平成27年 (2015年) 総合戦略室長兼経営企画部長  
平成28年 (2016年) 経営企画部長  
平成29年 (2017年) 再任用 経営企画部施設経営課長補佐  
平成29年 (2017年) 10月2日  
～平成30年 (2018年) 1月12日 美濃加茂市副市長  
平成30年 (2018年) 1月28日～ 現職



ます。岐阜県自体が、これまであまり知られていなかった面があると思いますので、今日は少しお時間をいただいて当市の魅力をPRしたいと思います。市は、岐阜県の南端に位置し、すぐお隣が愛知県です。岐阜県は豪雪のイメージがあるかもしれませんが、美濃加茂市では雪はほとんど降りません。また日照時間が長く、夏は暑い気候です。海はありませんが、大河木曾川と飛騨川に接しています。

江戸時代から中山道太田宿という宿場町を中心として発達してきたまちです。中山道は、江戸と京都をつなぐ街道で、皇女和宮などのお輿入れなどがあり姫街道とも呼ばれているようです。

また、明治の文豪、坪内逍遙は美濃加茂市の出身です。坪内逍遙は、小説神髓や当世書生気質などの作品やシェークスピア全集の翻訳を通して、近代日本文学の基礎を造った偉大な人物です。その功績を称えて、当市と早稲田大学が主催して「坪内逍遙大賞」を設け、演劇や舞台活動などの世界で活躍している個人や団体を表彰しています。最近では、女優の吉永小百合さんや、渡辺美佐子さんなどが、大賞を受賞しました。2018年は、NHKの「半分、青い。」というドラマの脚本家である北川悦吏子さんが大賞に選ばれました。北川さんは、美濃加茂市の出身です。授賞は、市民の皆さんと一緒に祝いするのですが、当日は、芸能界の役者さん方にも来ていただいて、多くの人々

で賑わいました。

交通の面では最近、高速道路ネットワークが大きく広がっています。新名神や新東名さらには東海北陸道や東海環状道などのインフラ整備が進められ、東京や大阪、北陸などとの距離がどんどん短くなっています。

また、美濃加茂市では、柿や梨などの果物が採れます。今は、これらの果物のブランド化も進めています。

美濃加茂市は、大きな地場産業がないまちです。そこで、先人たちは積極的に企業誘致を行ってきました。交通アクセスに恵まれているため、様々な大手企業を誘致することができました。そうした背景から、当市へ移住する外国人が非常に多かったのです。

## 企業の進出で全市民の9%が外国人に

本題に入りますが、美濃加茂市は人口が約5万7,000人で、そのうち9%近くが外国人市民です。全国の市の中では、人口比率としてはおそらく日本一でしょう。

1989年(平成元年)頃から少しずつ外国人市民の人口が増え、そこから20年ぐらいい間に、最も多いときで約6,000人になりました。人口比率でいうと10%超が、外国人となったのです。

企業誘致を進める中で、2008年のリーマン

ショック等の影響で某大手電機メーカーが工場を閉鎖することとなりました。当時、市役所で担当部長を務めていた私は、企業のビジネスに対する考え方の厳しさを痛感しました。

その工場の設立により、およそ2,000人の外国人の方々が当市に転入されました。その半分以上がブラジルの方々でした。いずれは母国へ帰っていくのだろうと思っていましたが、次第に戸建ての家を買う外国人住民が増えてきました。家を買った以上はここで生きるんだという非常に強い意志を持たれる外国人が多くなってきたのです。

閉鎖に際して、生活面での不安などもあったため、市内のいろいろなところで説明会を行いました。ところが、外国人市民には、代表者がいなかった。ほとんどの方が個々で動いていましたので、誰に相談したらよいのかわからなかったのです。

たまたま電機メーカーの労働組合の方々が彼らの代理人になり、市とだいたいやりとりがありました。十分な対応はできなかったのですが、それにもかかわらず、市内に残ろうという気持ちを持った人が大勢いました。「美濃加茂が好きなんです。」と言われる方もありました。そんなことが少しずつ政策を転換していくきっかけになりました。

2015年頃からこの5年ほどで、また外国人の人口が増加し始めています。特に最近、フィリピンの方々が激増しています。今、外国人市民は5,000人ほどとなっていますが、出身はブラジルとフィリピンが半々ぐらいとなっています。

しかし、外国人市民を中心に戸建ての家を買う人が増えてくると、固定資産税などの問題も出てきます。そこをしっかりと理解していただかないと市も困ってしまいます。そういう外国人市民を対象にしたローンの組み方などをしっかり教えてくれる民間のハウスメーカーも出てきました。ただ、

建売住宅を売却した後は、もう知らないといったように、事後のフォローが行き届かないケースもあるため、市の建築部門としては注意を払っています。

当時、そういった問題を解決するため、市がスペースを確保して、「何か問題があったら集まってください」という多文化センターをつくりました。運営はすべてブラジルの方々に委託しました。日本とは宗教、文化が違うので、ブラジル人自らが主体になって、新しく来られた方にいろいろなことを伝えていただくことを目的としていました。

日本人を巻き込んで、自分たちの文化を知ってもらうイベントも多く開催されました。リオのカーニバルのようにサンバを踊り、大いに盛り上がりました。しかし、残念なことに電機メーカーの撤退と同時に、そういう流れも波が引くように消えてしまいました。やはり、根底にある雇用であるとか社会保障を含めた問題にしっかり取り組んでいかないと、地元で根付いた多文化社会はできないと思っています。

先ほどもお話ししたように、外国人市民を国籍別に見ると、特にブラジル、フィリピンの方々が増えています。さらに最近、ベトナムの方も増えてきています。入管法が改正されましたが、その影響というよりは、市内に知り合いや親戚がいるから当市に来たという方もけっこう多いようですね。

市役所では、市民課の窓口などで十数人の通訳職員が対応していますが、基本的にはポルトガル語と英語です。外国人市民の年齢別人口は、働き手である15歳から60歳ぐらいが増えてきています。こうした方々は、いざというとき地域の助けにもなります。

当市に、自治会という地縁団体がありますが、最近、その役員さんに外国人市民の方がなったり、また、消防団に加入する方もでてきています。

パートナーとしての外国人市民が、これから重要だと改めて認識しています。

## 相互理解を深める地道な活動を続けることが大事

この30年間の間で、当市では外国人市民の数が20倍になりました。相互理解を深めるために、これまで市としてどのようなことに取り組んできたのかについて、お話ししたいと思います。

私の家の近くで住宅団地の造成が始まり、たまたま家の隣にブラジル人のAさんが引っ越してきました。しばらくして、「明日、バーベキューやるから来てください」とAさんから言われました。私が隣家へ行くと、庭に多くのブラジルの方が集まっていました。日本人は私一人。せっかくの機会ですから私だけではもったいないと思い、近所の方たちにも声をかけて集まっていただきました。わいわいと賑やかで楽しかったです。

そのときにAさんがおっしゃったのは、「私には保育園の子どもがいますが、妻は全く日本語が話せません。ですから、皆さん助けてください」。それを聞いて、彼の生活状況を理解できていなかった自分が情けなくなりました。

その一方で、やはり生活習慣やマナーを教えなければいけないと痛感しました。例えば、バーベキューのやり方です。Aさんは、それから毎週のようにバーベキューをしていました。あまりに頻繁なので、「日本人がバーベキューをするのは、だいたい1年に2回ぐらいですよ」と言うと、とても驚いていました。

また、彼らはビールを延々と飲み、たくさん話をする。ですから、夜11時になっても12時になっても話が尽きない。あるとき近所から、苦情が出ました。そこで、「日本では、夜10時ごろになったらバーベキューはやめますよ」と話したら、「ごめ

んなさい」と謝罪されました。それから10時ころになると、あとかたづけを始めています。私たちがしっかり伝えていなかっただけなんですね。

また、ごみ捨てのマナーも最初はぐちゃぐちゃでした。「こんなふうにするんですよ」とお話しすると、きちんと守ってくれるようになりました。

隣近所がお互いに協力して住もうという自覚を持って、しっかり説明すれば変わるのだと思いました。しかし、いまだにゴミを全部ごっちゃに置いていく外国人市民もいます。まだまだ努力が足りないかなと思います。

一方、様々な問題を抱えているにもかかわらず、それを言えない外国人市民がたくさんいることもわかりました。

外国人市民に集まっただいて、気軽にいろいろな話をする機会がありました。

そのときに最初に質問したのは美濃加茂市に來てから2年ぐらいの女性でした。子どもさんがいて、小学校へ入れたいがどうしたらいいかを教えてほしいとのことでした。近くの自治会の班長さんに相談に行ったところ、「あなたたちはうちの自治会に入らなくてもいいです。自分でやってください」と言われたというのです。それを聞いたときは泣けましたね。

その班長さんも悪気があったわけではないと思いますが、やはりまだまだ外国人市民に対する認識が足りない。そういう考え方を少しずつ変えていきたいと思っています。

## 大切な日本語のコミュニケーション能力

外国人市民にとって最も大事なものは日本語です。美濃加茂市で暮らしていくという覚悟を決めるのであれば、ここで生きるためのノウハウ、スキルをちゃんと身につけてほしい。その根本となるの

が日本語でしょう。

当市では、日本語教室をいろいろな場所で開いています。いろいろな広報ツールを活用して、ポルトガル語や英語で日本語教室の開催をお知らせしています。あるとき、外国人の方がその案内が書かれたチラシを持ってきて、次のように言いました。

「市長さん、日本語勉強したいけど、ここに書いてある時間に私たちは働いています。だから何とか、1か月に1回でもいいので、私たちが参加できる時間に開いてください」

外国人の方々をサポートできていると思っていましたが、彼らの立場に立ったスケジュールや仕組みになっていなかったのだと反省しました。

それから、学校に行きたいという希望を持つ三世、四世の方が出てきました。お父さん、お母さんの多くは人材派遣会社を通じた臨時職扱いで、なかなか正社員としての採用には至っていない。だからお子さんに対して、「16歳になったら働け」という。高校へ行きたいと言っても、「何を言ってるんだ」という親御さんがまだ多い。子どもにしてみれば、自分の将来に夢を持ってない、そういう現実もあります。

だから、学校へ行きたいという、彼らの夢が実現できる仕組みをつくりたいと思っています。最近、名古屋の有名大学に入る優秀な生徒が出てきました。独学で、親からの援助は一切受けず、アルバイトで高校を卒業して、大学に入学しました。彼に続けという学生たちが、少しずつですが増えています。

市では、多文化共生推進プランを2009年から5年計画ごとに策定し、現在、第3次を進めています。とにかく重要なのはコミュニケーション。それから生活基盤、外国人市民の自立です。行政として、多文化共生に向けた新たな仕組みづくりを進

めていきたいと思っています。

その一環として、広報活動の多言語化にも力を入れています。まだまだ十分とは言えませんが、ホームページは、ポルトガル語バージョンと英語バージョンをつくりました。最近は若い方が増えてきていますから、やはりSNSの利用が増加しています。

それから、外国人市民へのサポートでは、多くの通訳職員が頑張ってくれています。窓口を訪れる外国人に対しては、翻訳タブレットを使って通訳をやっています。彼らは、聞きたいことを、タブレットの画面に向かってしゃべります。画面の向こうにいる通訳が、それをしっかり聞いて、市の日本人スタッフに、彼らはこういうことを言っていると伝えることができます。最近の機器の進歩は目覚ましいものがありますね。

ただし、直接対面してやりとりした方がよい場面も多々あります。そうしないと誤解が生じたり、理解できないケースもあります。外国人市民が多く集まる場所に赴き、いろいろな仕組みについて理解を深める取組みを進めています。

最近、だいぶ減りましたが、自動車に関して任意保険に入っていない人もいます。先日、保険会社と連携して、外国人市民に対して、任意保険は日本では当たり前であることや、掛け金について説明していただきました。命にかかわることについては、最優先で考えなければならないと思っています。

## 日本語のレベルに応じた クラスで学べる仕組みづくり

今回、一番お話ししたいことが「日本語」の問題です。いきなり大人たちに「頑張って外国語を覚えてください」と言っても難しいでしょう。ですから、子どものうちから教えていこうということで、

保育園から小学校、中学校ぐらいまでの間に、日本語を理解してもらう機会を増やしています。

その結果として、子どもが日本語をしゃべり出すと、親も少しずつ日本語がわかってくる。また、子どもが保育園や小学校に通い出すと、親御さんも、かかわらなければいけない場面が増えてくる。なかなか参加してくれなかった大人たちが、「じゃあ私も」と日本語教室に参加するようになりました。

保育園では、日本語の初歩を学ぶプレスクールを行っています。外国人の小さな子は、日本語がわからないので、やっぱり騒ぎますよね。でも、一緒にご飯を食べたりする中で、少しずつですが、集団として落ち着き始めたという効果も見られます。親御さんも、子どもたちから「すごく楽しい」という話を聞くので、大変喜んでくれています。

市として自慢したいのが、のぞみ教室です。

外国人の子どもたちは、1年生の最初から小学校に入るケースばかりでなく、途中から小学校に入ってくる場合もあります。そうした子どもたちの学力をしっかりと保証するためには、日本語能力が必要です。そこで、日本語の習得能力に応じて勉強する、のぞみ教室というスペシャルな場所をつくりました。日本語の習得の度合いによってクラス分けをしながら学んでいます。

いきなり、「あなたは3年1組」と、小学校にぼんと入れるのではなくて、のぞみ教室で3か月から半年ぐらい、日本語の基礎をしっかりと勉強して、小学校に入っていただく。そういう流れをつくっています。当初、場所がなかったものですから、のぞみ教室は体育館の一部を使って始めました。20名ほどのキャパで、夏は暑く、冬は寒い場所でしたが、昨年度に、国や県の協力をいただき、40人規模で学べる施設を新たに作りました。

のぞみ教室の終了後、さらに学習が必要な子ども

に関しては、学年ごとに日本語を学ぶ国際教室という特別な教室を設けています。のぞみ教室である程度の生活指導を受けて、学校での日本語がわかってきたとしても、例えば、やっぱり理科がわからないとか、そういう個別の課題が出てきます。そのような子どもたちのために国際教室があります。

これらの学びの場によって、子どもたちの日本語能力が高まってきました。これまで、市として様々な取組みを進めてきましたが、外国人市民と共存ができることを実感しています。

今後の課題としては、さらに、市に住む外国人の国籍が多様化し、いろいろな言葉が増えてきたときにどう対応するのか。それから先ほど申し上げたように、美濃加茂市で働きたい、市内の企業で正社員になりたいという方たちの要望をどう実現するかということです。

そのために、やさしい日本語の取組みを推進していこうと思っています。

やさしい日本語とは、日本人市民が、外国人市民に対して、簡単な分かりやすい単語で話しかけようとするものです。少し勇気を出して、こちら側からも、言葉を投げかける、そんな関係を築きたいと思います。

また、就職問題については、市内の商工会議所や市内企業と連携して、正職員として採用される外国人市民を増やす環境を拡大していきたいと思っています。

最後に外国人市民の皆さんに伝えたいのは、次の言葉です。

「あなたたちはパートナー。一歩ずつでよいので、お互いに歩み寄りましょう」

みんなで一歩前に出る。そうすることによって、私たちは美濃加茂市で外国人市民と共生していきたいと思っています。